



道德の科学的研究について

「道德」はどのように生まれ変化してきたか

道德科学研究センター生命環境研究室客員教授 立木教夫



著者近著 (麗澤大学出版会)

時代を先取りしていた 廣池博士の研究構想

廣池千九郎博士は、『道德科学の論文』の基礎論部分で、進化論、遺伝学、心理学、人類学などの学問的成果を援用して、「道德」の科学的研究の基礎付けを試みられました。

近年、「道德の起源」とか「道德の進化」を科学的に議論できるようになり、二〇〇〇年(平成十二年)以降興味深い著作が次々と出版されています。

例えば、霊長類学者・進化人類学者のクリストファー・ボーム著『モラルの起源―道德、良心、利他行動はどのように進化したのか』、

霊長類学者・進化生物学者のフランク・ドゥ・ヴァール著『道德性の起源―ボノボが教えてくれること』²⁾、進化心理学者のデニス・クレブズ著『道德の起源―一つの進化的説明』³⁾、また、進化人類学者のマイケル・トマセロ著『人間の道德の自然史』⁴⁾などがあります。

これらの研究を見てみると、廣池博士の構想が、いかに時代を先取りしたものであったかを、逆に印象付けられます。

さて、一般に「道德とは何か」ということは難しく、「道德の科学的研究」などと言うと、「どうやるのですか」とすぐに突っ込まれたりします。このような問いにきちんと答えるには、進化諸科学の研究が必

要となります。

人間の道德が生まれてくるには、さまざまな能力が必要です。例えば、記憶能力の発達なしに人間の道德は考えられません。これも進化の中で獲得されたものです。

人類は、二足歩行を始めてから木の上で寝ていたと考えられています。しかし、木の上で寝ると、転落する危険性があります。そのため、睡眠は、常に浅かったと考えられています。浅い眠りでは記憶をうまく蓄積することができません。ホモ・エレクトス(百八十万年から二十万年前まで生存)の段階で、地上で寝るようになると、レム睡眠や徐波睡眠が可能になりました。それにより記憶の固定、連想思考

ができるようになり、心的能力が一挙に向上しました。これは一例ですが、いずれにせよ、脳の機能が向上しないと人間の道德は出てこないのです。

大成功をおさめた 二人称的道德

トマセロの道德起源説では、四十万年前頃のハイデルベルク人の段階で、最初の道德が獲得されたと仮定しています。この道德は、二個体間に起源した道德で、「二人称的道德」と呼ばれています。

ここで、食糧採集の場面を想定し、二人称的道德が創発するところを描いてみましょう。

二個体がパートナーを組んで食

糧採集に出かけます。このようなことにも高度な能力が必要なのです。サルの場合、自然状態で、二個体がある目的を設定して協力するということはないと言われてます。

パートナーを組む能力を手にしたあと、今度はパートナーを確保しなければなりません。適切な相手を選ぶと言っても、自分一人を決めるわけにはいきません。相手も同じく選択権を持っているからです。すると、相手に選んでもらえるような能力なり資質を備えていなければなりません。

パートナーと組んだら、食糧採集という共通の目的を認識し、その目的を共有し、協力して目的を達成しなければなりません。互いに平等な立場に立っていますから、相手のやり方に対し、こうしてほしい、ああしてほしいといった相互調整が行われます。相手に対する要求は、二人の間に創発した「われわれ」の視点に立って、建設的に個々の行動を見ることができるようになってはじめて、可能になる

のです。ここには「われわれ」という共同主体をつくり出す能力、「鳥の目の視点」に立って認識する能力、相手の立場に立って状況を理解する能力などが必要です。

このような能力が獲得されると、「われわれ」の視点から見た理想的な働き方に照らして、自己の行動を調整することができるようになります。

二個体間で、理想(基準)に照らして自己の行動を調整するところに、道徳の基本形が捉えられます。このとき同時に、理想(基準)に合わせて自分の行動を調整「すべき」という感覚が生まれたと考えられます。この「二人称的道德」は、大成功をおさめました。

「二人称的道德」と「客観的道德」

トマセロは、今から十五万年前頃に、更に新たな道徳の段階に入れたと考えています。この段階の主役はホモ・サピエンス(三十二万年前頃から現在)です。

人口増加に伴い、集団規模も大

きくなり、集団間の争いも増えました。この大きな集団を文化と呼びます。集団内には仲間であつても、知らない人たちが増えていきます。食糧の獲得や、集団の防衛には、そのような見知らぬ仲間と協力して、目的を達成する必要が 있습니다。このとき、二個体だけで行っていた「二人称的道德」では、対処できなくなりました。

二個体間で創発した「われわれ」を超える、新たな「われわれ」が必要とされました。これは集団内の全成員間で創発した、文化的な「われわれ」です。この文化的な「われわれ」の視点で捉えた理想(基準)は、具体的には、慣習、規範、制度といった形を取りました。新しく集団内で誕生する子供たちは、教育を通して、すでに客観的に存在している、慣習、規範、制度を身につけていきます。行動は、内面化された、慣習、規範、制度を参照して調整されます。この集団レベルで生じる道徳は、「客観的道德」と言われます。これが約一万年前まで行われていた道徳です。

その後、文字が発明され、社会形態が変化し、環境に合わせて道徳も多様化していきます。しかし、過去一万年間の道徳は、本質的には「二人称的道德」と「客観的道德」であると考えられています。

廣池博士が提唱された最高道徳は、これら道徳の科学的研究と比較するなら、行動調整の参照基準を、慣習、規範、制度から、聖人が捉えた「神の心」としての「自然の法則」にレベルアップさせた道徳である、と言つてよいのではないのでしょうか。

注

- 1 Christopher Boehm, *Moral Origins: The Evolution of Virtue, Altruism, and Shame*, Basic Books, 2012. 邦訳は、斎藤隆史訳、白揚社、2014年。
- 2 Frans de Waal, *The Bonobo and the Atheist: In Search of Humanism Among the Primates*, W. W. Norton & Company, 2013. 邦訳は、柴田裕之訳、紀伊國屋書店、2014年。
- 3 Dennis L. Krebs, *The Origins of Morality: An Evolutionary Account*, Oxford University Press, 2011.
- 4 Michael Tomasello, *A Natural History of Human Morality*, Harvard University Press, 2016.